子どもと絵本――絵本と子育ち・親育ち

執筆者：竹迫　祐子
掲載誌：「世界の児童と母性」[特集]子どもと子どもの文化財　2010年4月
資生堂文化財団

はじめに

絵本は、“人がはじめて出会う美術であり文学” であり、“0歳から100歳までの人が楽しめる文化財”と、私たち、ちひろ美術館は考えている。

絵本と言えば、“子どものもの”というイメージがしっかりと定着しているし、辞書を引けば、「絵を主にした子供向きの本」とあるから、“0歳から100歳まで”と聞いて、怪訝な顔をする人も多いかもしれない。確かに、絵本は子どもにとって、重要な文化財のひとつであるが、この「子どものもの」という認識に、少々、引っ掛かりを感じなくもない。世に「子供騙し」という言葉あるが、子どものためのもの、子ども用のものと言えば、大人のそれと違って一段も二段もレベルが低いものでよしとする風潮が、未だに存在するからである。「子供騙し」とは、「子供をだますように単純で幼稚な事。相手をばかにしたような方法」(大辞泉)ということになるが、真に優れた文化財としての絵本がそれでは困る。

世界を代表するアメリカの絵本作家、モーリス・センダックは、作り手の立場から、「みんなは普通、絵本というと、ごく小さい子どもに読んでやるための絵のたくさんはいったやさしい本と考えがちですが、決してそれだけではありません。私にとっては、これは徹底した意識の集中と制御とを要する複雑な形式の詩にそっくりな、おそろしくむずかしいものです」と語っている。

幼い時期にこそ、良質の文化に出会い楽しむことは、人間形成にとって重要である。その考え方は、今日次第に広がってきた。良質の絵本が、幼い子どもの心を捉えると同時に、成熟した大人にとっても人生の折々に意味を持ち得ることが、盛んに語られるようになってきた。絵本は大人の心を動かし得るし、大人を唸らせる絵本だからこそ、子どもを満足させることができる。そこに、「子供騙し」はない。

ここでは、そうした前提にたって、絵本と子どもの関係を考えていきたい。

「絵本」とは

「絵本」は広義には、“絵入り本”(=絵が入った本)の総称であり、古くは絵巻物から江戸時代の絵草子を含めて規定される。一方、狭義には、近代以降の児童観の確立と重なって、文字の読めない幼い世代を主たる読者対象とした子どもの本の一ジャンルという考え方が一般的である。

日本で、子どもの本の一ジャンルとして絵本を捉える考え方は、20世紀初頭に起こり、第二次世界大戦以降ほぼ定着した。戦後、日本の絵本は飛躍的な発展を遂げる。その背景には、戦後の教育運動、児童文化運動との関連が深い。二度と戦争をくり返さない、子どもを戦場に送らないという決意が、子どものための教育と文化を育てる原動力となり、昂揚する気運の中で絵本も発展して

きた。

そうした歴史からも、日本における絵本研究は、長年、主として教育、もしくは児童文学の一分野として取り組まれることが多かった。それが、近年、次第に変化してきている。1997年に創設された絵本学会は、設立趣意に、「絵本学とも呼ぶべき」絵本の「表現の位相を把握し解明していくための研究」が期待され、そのために「従来の絵本領域の枠組みを越えた、造形学、美学、美術史、哲学、記号学、論理学、教育学、言語学、心理学、文化人類学などの諸科学、また、デザイン、絵画、映画、演劇、文学、漫画その他様々な分野の専門家相互の協力による情報交換、共同研究」が望まれると謳っている。

絵本の専門美術館の立場からは、“美術として絵本の表現”と“絵を視野に入れた受容論(読者論)”という視点で絵本研究が深まることに期待している。

絵本の「絵」

絵本の構成要素は、「絵」「言葉（テキスト)」「 ストーリー」あるいは「テーマ」であるが、同時に、本という「造形」としての性格も合わせ持っている。絵本とは、“絵と言葉とで、ストーリー（テーマ）を語る造形”という総合芸術と言える。

言うまでもなく、絵本という存在を決定付けているのは、「絵」である。所謂、挿絵とは異なり、絵本の絵はそれ自体がストーリーを展開し、登場人物の性格や動き、内面等を物語る力を持っている。絵とテキストは、それぞれが自立しながら、お互いを補い合い調和を図っている。このことを、センダックはわかりやすく次のように語っている。「テキストと絵とのあいだにどうバランスをとるかということが、その本を作っていく上でのむずかしさとなり、緊張とも喜びともなるわけです。決しておなじことをするわけにはいきません。文章で書いたことを、その通り絵にしてはいけないのです。テキストには絵が働くことのできる余地を残しておかなくてはなりません。文章で書いたことを、その通り絵にしてはいけないのです。そして、絵がひと働きしたら、もう一度言葉にもどります。そうすれば、今度は絵に拍子を取ってもらって、言葉が力を尽すことができるわけです。」こうして創造される絵本は、幼い読者、とりわけ、言葉を獲得する前の段階の子どもたちにとって、大きな役割は担う。

長年、幼児心理学の領域から絵本と子どもの関係に取り組んできた佐々木宏子は、「絵本が『絵で語る』という特徴を生かして、思考が言葉によって未だ支配されない幼い子どもの心を描いてきた」ことは歴史的な事実であり、「絵本が持つ本質のひとつ」である。言い換えれば、絵本の作家や画家は、読者が幼い子どもであるなら、必然的にテーマとして彼ら自身の幼年時代、「とりわけそのなかでも印象深いエピソード」を描いてきた。「それら数々の想起されたエピソードは、それが優れた芸術的資質を持つ画家の手になると、言語で表現することは難しい幼い子どもの非論理（論理）や感情の世界を、ありのままに近い形で絵にすることができます」と解説する。だからこそ、幼い子どもたちはやすやすと絵本の世界に入り、感じ、楽しみ、共感することができる。

文化財としての絵本の特異性

ところで、絵本は、それ自体が豊かで魅力的な文化財であるが、文字を読む

ことのできない幼い子どもとっては、大人（もしくは文字が読める年長者）の介在なしには、成り立たない特異な文化財でもある。これは、音楽に近いと言えるかもしれない。音楽は、作曲家が作った曲と職人が創造した楽器とで作り出されるものだが、すばらしい曲と美しい音色を奏でうる楽器があったとしても、それを演奏する演奏者がいなければ、聴衆には届かない。

適切な介在者が存在することで、自分で文字が読める段階以前の子ども、さらには、言葉を獲得する以前子どもにとっても、絵本は楽しさを共有でき、文化財としての機能を持ちうることになる。

絵本の魅力

例えば、『いないいないばあ』（松谷みよこ・文　瀬川康男・絵　童心社）は、初版から 40 年以上を経た今日まで 400 万部以上が刊行され、今も愛され続けている絵本である。長い命を持った絵本でありえている理由は、「ことばのリズム」「展開の繰り返しのリズム」そして、「絵の魅力（画面展開の意外性）」の三者が絶妙に調和していることに他ならない。

「にゃあにゃが　ほらほら　いないいない」で、いないいないと顔を隠したネコが描かれ、頁をめくった瞬間に、「ばぁ」ということばとともに、顔から手を離したネコの場面になる。その後、「くまちゃんが　ほらね･･･」「こんこんぎつねも･･･」と繰り返され、最後はのんちゃんという女の子で終わる。極めてシンプルな内容の繰り返しではあるが、こなれた言葉の親しみやすさ、語りやすさ、覚えやすさが、読み手も聴き手も、大層すんなりと絵本の世界に入っていくことができる見事な絵本である。

幼い読者の心を捉える絵本では、「繰り返し」という方法がよく用いられ、その力は大きい。「繰り返し」は、ものごとを認識し理解する力がまだ十分ではない幼い子どもにとっては、幼い（拙い）理解や認識を助け、読者に安心感を与える。さらに次なる展開への予測、次に何がおこるかを想像させることに繋がり、その予測が共に絵本を読み合う人との共感をもたらす。ただし、「繰り返し」の終わりは、同じ繰り返しではいけない。繰り返し＝予測を超える然るべき帰着が必要である。

さらにこの絵本の絵について付け加えるなら、それは渋い色調で、大人にも魅力的である。旧来、絵本の絵は“シンプルで、明確な線と明るい色彩でなければ、幼い子どもは理解ができない”と語られてきたが、この絵本は旧来の概念から逸脱している。ということは、子どもが理解でき好きだと感じる絵は、それほど狭くはないということであろう。

子どもと絵本

前述の佐々木は、子どもが絵本を読もらうということは、「ほかの遊びのように手足を自由に使って、直接に物や人に働きかけるのではなく、基本的に頭の中でのみ集中的に遂行される心理・意識レベルの活動」で、「その絵本のテーマがどうであれ、心理機能の面からいえば、大変高度な認識活動」であって、それは、「感覚・知覚・記憶・表象・言葉などを使って絵と文を読み取る人間以外の動物にはない優れた活動」だとしている。つまり、子どもは、絵本を楽しむために、持てる能力を駆使しなければならない。総じて、極幼いころから絵本を

読んでもらう経験を多く積んでいる子どもの方が、幼児期になって落ち着いて絵本を楽しめる傾向が高いのは、そうした経験の量に関係すると言えよう。

同時に、絵本を読んでもらうこと自体が、楽しいものでなければ成長の糧にはならない。それは読んでもらった時間や冊数とは比例しない。佐々木は、「子どもが絵本を読んでもらって楽しむためには、何よりも読み手の大人との間に基本的な信頼関係ができあがっていなければなりません。笑顔を通しての交流、肌の触れ合いを通しての交流、意味がわからなくてもやさしい人の声への集中は、いずれも子どもが絵本を楽しむための前提条件」と指摘する。

子育ちと絵本　親育ちと絵本

昨今、絵本に関わる活動は目を見張るほど活発になり、子どもが絵本と出会う機会は日増しに増えてきている。子どもに絵本を繋ぐ介在者も、母親だけでなく、父親や祖父母、兄姉、保育園や幼稚園や学校の先生、図書館の司書、読み聞かせボランティア等々、様々な存在が見られるようになってきた。絵本選びや読み方についても、近年では、多様な機会に学ぶチャンスが生まれてきた。例えば、地域の保健センターで行われる乳児健診の機会などに、赤ちゃんと一緒に絵本を楽しむ活動も盛んに行われるようにきている。NPO法人ブックスタートの調査によると、同法人が関わるだけでも、全国1795市町村中725自治体がブックスタートに取り組んでいる。当館も絵本を提供し、地元の保健センターと提携して、赤ちゃんと絵本の出会いの活動に取り組んでいるが、小さい頃から自分自身が絵本と親しんできたお母さんだけでなく、むしろ、そうした経験の少ない人が、絵本を読んでもらうわが子の姿、変化を目の当たりにして、絵本に開眼するケースは少なくない。館内の図書室では、日ごろ絵本を読む機会がほとんどないようなお父さんが、子どもにせがまれてたどたどしく読みはじめ、何冊も読み続ける姿も目にする。絵本を読み合う中で、子どもも大人も互いの表情や声の調子、反応を感じあいながら、特有の時間を過ごしていることがわかる。確かに、絵本体験は子育ちであると同時に、親育ちにも繋がっている。「読み手の大人との間に基本的な信頼関係」の構築と、「笑顔を通しての交流、肌の触れ合いを通しての交流」は、こうした時間の中から生まれる。

おわりに

「子どもたちがごく幼いうちからすでに自分を引き裂く感情とはお馴染み」で、「恐怖と不安は彼らの日常生活の本質的な一部」であり、「彼らは常に全力を尽して欲求不満と戦っている」。そして、「子どもがそれらから解放されるのは、空想（ファンタジー）によってなのです」と、センダックは自らの幼少体験と青年時代の子ども観察から記している。その意味で、空想は子どもが成長する上では不可欠の行為と言える。絵本は、映画やアニメーションと同様に、空想の世界を実際に見せる力を持つが、「人生を偽りなく反映すること――空想（ファンタジー）の人生においても、現実の人生においても――は、あらゆる偉大な芸術の基礎です」とも、センダックは語っている。

たとえ幼い時期であったとしても、空想は現実からの逃場ではないということであろう。現実の困難に立ち向かうとき、子どもはいっとき空想の世界に避

難することはしても、それはあくまでも「いっとき避難所」であって、永久にそこに踏みとどまることはできないし、とどまらせてはいけない。

絵本という文化・文化財に関わるとき、「人生を偽りなく反映することは、あらゆる偉大な芸術の基礎」という言葉は、ファンタジー・ブームと言われる今日、極めて大きな意味をもっている。

経済優先の世の中で、近頃、盛んに「費用対効果」に求められるが、文化が結果をもたらすまでの時間は長い。赤ちゃんのときに読んでもらった絵本の記憶が蘇るのは、その人が成長し結婚し親になったときかも知れない。つまり、20年から30年のサイクルで、絵本が人の内側に作用することだってある。“文化を育てる”“文化財を守る”という営みは、そんな長いスパンで考えられなければなるまい。1000円の絵本の効果は、20年後30年後の未来に、対価を大きく超えて戻ってくる。また、そんな魅力的で息の長い絵本の創造こそが、今求められている。

参考文献、他：

・河合隼雄、松居直、柳田邦男/著　2001年「絵本の力」岩波書店

・セルマ・G・レインズ/著　渡辺茂男/訳　1982年「センダックの世界」岩波書店

・モーリス・センダック/著　脇明子、島多代/訳　1990年「センダックの絵本論」岩波書店

・佐々木宏子/著　1993年「新版　絵本と子どものこころ　豊かな個性を育てる」JULA出版局

・佐々木宏子/著　2000年「絵本の心理学　子どもの心を理解するために」新曜社

・佐々木宏子/著　2006年「絵本は赤ちゃんから　母子の読み合いがひらく世界」新曜社

・田丸尚美/著　2007年「臨床発達心理実践研究 2007 第2巻 117-122 乳児検診での絵本体験に見る親子の関わり」

・2007年「絵本学会の10年」絵本学会

・絵本学会　http://www.u-gakugei.ac.jp/~ehon/

・特定非営利活動法人ブックスタート　www.bookstart.net